

# 自主性育成と大学教育

—ボランティア活動を行う学生へのインタビュー調査等からの一考察—

青木 理奈, 鈴木 静, 小佐井 良太, 福井 秀樹, 石坂 晋哉

愛媛大学法文学部

## Encouraging Voluntarism through University Education: An Exploratory Analysis of the Relationship between Students' Volunteer Activities and University Lectures

Rina AOKI, Shizuka SUZUKI, Ryota KOSAI, Hideki FUKUI and Shinya ISHIZAKA

Faculty of Law and Letters, Ehime University

### 1. はじめに

本研究<sup>1</sup>の目的は、アクティブラーニング型の大学授業と学生ボランティア活動との関係につき、自主性育成の観点から現代的な特徴と課題を明らかにし、今後の大学教育の方向性を展望しようとするものである。

本来、自主性は、若者がその成長過程にあわせて自らが育成すべきことである。しかし、多くの大学生が明確な目的がないまま大学へ進学し、大学の授業に「受け身」であることを踏まえると、漫然と放置するのではなく、自主的な行動や思考を育む機会を与える授業を考えるべきではないか。また、大学卒業後に、どんな専門知識を得たかということに加え、どのような姿勢で取り組んだか、が問われる。この意味でも、自主性は非常に重要である。

本稿において、自主性とは「自らが選択、チャレンジし、設定した一定の課題について他人から指示されなくても自分の力で考え行動できること」と定義する。学生自身が、自分の責任で動こうとする行動力が加わる意味合いも含む。本稿では、ボランティア活動を生みだしている授業科目の担当教員へインタビューを行い、教員目線での「大学授業」「学生ボランティア活動」について分析していくと同時に、大学授業を契機に、ボランティア活動に参加し、継続的に活動をしている学生へのインタビューを通じて、大学授業が彼／彼女たちに与えた影響の特徴と課題を整理するものである。さらに、学生には、ボランティア活動を始める契機や活動を続けていくうえで影響があったと考える授業を挙げてもらい、その科目がどのように魅力的

であったかを尋ねた。これらのインタビューを通じて、大学教育が自主性を育成する諸条件等を教員と学生、双方の立場から考察し、その特徴と課題を明らかにする。

### 2. 大学教育におけるボランティア活動に関する政策動向

#### (1) 文科省によるボランティア活動の単位化要請の流れ

1990年代半ばまで、大学生のボランティア活動は、その名の通り大学生が自主的に行う活動であり、大学授業との関係で捉えられることは少なかった。しかし、後に「ボランティア元年」と呼ばれるようになった1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の時には、全ボランティア数(140万人)の4割にあたる数の学生が被災地に駆けつけ、ボランティア活動をした<sup>(8)</sup>。阪神・淡路大震災後の1998年、文部省は高等学校におけるボランティア活動等に係る単位認定を認め<sup>(11)</sup>、学校教育法施行規則第98条第3号において「ボランティア活動等に係る学修の単位認定」が制度化され、2005年には、認定できる単位数の上限が、20単位から36単位に拡大された。

そして、東日本大震災が発生した2011年に、文科省は、各国公私立大学長、各公私立短期大学長、各国公私立高等専門学校長宛に、「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について」と題する通知<sup>(13)</sup>を行った。この内容は、「今後、災害復旧の進捗状況に応じて、ボランティア活動への参加を希望する学生が出てくることを見込まれ」、「学生が、大学等の内外において、学修成果等を活

かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の円滑な社会への移行促進の観点から意義があるものであることから、被災地等でボランティア活動を希望する学生が、安心してボランティア活動に参加できるよう配慮、要請するものであり、内容は1. ボランティア活動のための修学上の配慮と、2. ボランティア活動に関する安全確保及び情報提供であった。具体的に1. ボランティア活動のための修学上の配慮については「ボランティア活動参加者に対し、補講・追試の実施やレポートの活用による学修評価、休学した場合のきめ細かな履修対応などを通じ、学生がボランティア活動に参加しやすい環境作りに配慮すること。」「各大学等の判断により、ボランティア活動が授業の目的と密接に関わる場合は、ボランティア活動の実践を実習・演習等の授業の一環として位置付け、単位を付与することができること。」「ボランティア活動のため休学する場合、その期間の学費の取扱など学生の便宜のための必要な配慮を図ることが考えられること。」が挙げられている。2. ボランティア活動に関する安全確保及び情報提供については、「ボランティア活動は内容によっては危険を伴うものもあることから、参加する学生に対し事前に安全管理の徹底やボランティア保険等への加入を呼びかけるなど適切な指導に努めること。」「被災地における状況や学生ボランティアによる支援要請等に関する情報について、文部科学省ポータルサイトなどを活用しつつ、学生に情報提供を行うこと。」が挙げられていた。このように文科省は、大学に対しても授業の一環でボランティア活動に参加する場合に単位を認める方向性を打ち出した<sup>(13)</sup>。この要請に応じる形で単位認定を認め文科省へ報告した大学は、2011年6月7日時点で、山形大、岩手大、滋賀大、大分大、明治大、文教大の6校だった。その後の毎日新聞の調査<sup>(8)</sup>によると、全国86の国立大学のうち、約4割に当たる32校の大学が単位認定を認めた(3校は未回答)。これらの大学の大半は、授業概要として、ボランティア前に講義を受けて、ボランティアの時間は30～60時間、その後レポートを書かせて1～2単位を与えるという内容で、授業の中でのボランティア活動は、教育的意義があると判断していた。

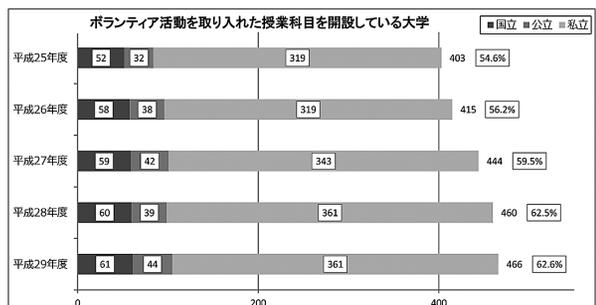
また、近年では、東京五輪が決まったことを受けて、2016年4月にスポーツ庁・文科省連名にて、各国公私立大学長、各国公私立高等専門学校長宛に「学生のオリンピック・パラリンピック競技大会及び同大会に係るボランティア活動等への参加に当たっての教育上の配慮について」と題する通知<sup>(14)</sup>を行い、「各大学の判断によりボランティア活動が授業の目的と密接に関わる場合は、オリンピック・パラリンピック競技大会等の会場や、会場の周辺地域等におけるボランティア活動の実践を実習・演習等の授業の一環として位置付け、単位を付与することができる」という内容の通知<sup>(14)</sup>がなされた。

さらに2019年の台風19号発生の際には、文科省は、各都道府県知事、各都道府県教育委員会教育長、各国公私立大学長、各公私立短期大学長、各国公私立高等専門学校長、厚生労働省医政局長、厚生労働省社会・援護局長宛に「令和元年台風19号に伴う学生・生徒のボランティア活動について」と題する通知<sup>(15)</sup>を行い、2011年同様、安心して参加できるよう配慮し、授業の一環として位置付け単位として付与するよう要請することを通知した。

## (2) ボランティア活動を取り入れた授業の実施

2005年には文部科学省中央教育審議会答申において、大学は「社会貢献・地域貢献の役割を『第三の使命』として捉えていくべき時代」との方向性が示され、大学の授業も、社会との連携が意識されるようになり<sup>(12)</sup>、ボランティア活動を教育カリキュラムに取り入れる大学が増えている。文科省では、「平成29年度の大学における教育内容等の改革状況について」調査を行い、その結果をとりまとめているが、平成29年度には、ボランティア活動を取り入れた授業科目を開講している大学は、調査全体(国公私立767大学)の6割に及ぶ結果となっている(Table1)。

Table1: ボランティア活動を取り入れた授業科目を開講している大学



出典：文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室「平成29年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」令和2年4月28日付

従来、社会福祉学の分野では、ボランティア活動とは、当事者が担う課題に対して①対人性・連帯性、②開拓性・先駆性、③運動性・批判性・代弁性を有し、これらの役割を果たす意味でも、「ボランティア活動・運動」は、その土台に結社の自由や表現の自由などの「市民的自由」が保障されていることが重要であると考えられてきた<sup>(16)</sup>。このような考えを基軸とすると、単位付与を前提とする大学授業を通じて、学生たちのボランティア活動を促進することは、学生の「市民的自由」、とりわけ学生の「自主性」を阻害するおそれはないのだろうか。

## (3) ボランティア活動の単位化に対する議論

災害時、そして東京五輪決定の際、文科省が単位化を要請する通知がなされた時には、ニュースでのコメンテーター

ターや各新聞の投稿欄、そしてSNS等で物議を醸した。賛成とする人もいたが、世論では反対という声が大きく、前出の毎日新聞2011年調査の結果<sup>(6)</sup>でも、国立大学の6割は、ボランティア活動を「単位認定しない」としたうえで、理由として「自発的行為に単位を与えるのは違和感がある」などが挙げられ、無償のボランティア活動を単位で誘導するような行為に、大学が難色を示している形となっていた。また桜井(2020)は、東京五輪ボランティア動員要請に対して、大学におけるボランティア活動支援では、政治的な圧力や影響について自覚を持つべきことにも言及しており、「政治主体が一方的に教育現場に対してボランティアの動員を呼びかけても、その後の『ボランティア文化の醸成』にはつながらない蓋然性がある」と批判している<sup>(17)</sup>。

このように、ボランティアの単位化に対し、否定的な見方の意見が根強い背景としては、自発性を本旨とするボランティア活動と、単位取得を前提とする大学教育との現代的関係が問われていると見てよいのではないだろうか。

一方、愛媛大学では、ボランティア活動を単位化する授業ではなく、受講後に、その授業のテーマに深く結びついたボランティア活動を実施する例が見られる。本研究グループは、このボランティア活動に着目して、授業との関連についてインタビューを実施している。本稿では、このうち共通教育<sup>2</sup>のある科目に着目して、大学教育とボランティア活動の関連や課題を考察していく。なお、本調査のインタビューは、愛媛大学法文学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施している。また、当日のインタビュー内容の録音承諾を得たうえ、トランスクリプトについては後日、内容確認をしてもらい掲載の許可を得ている。

### 3. 教員に対するインタビュー調査の概要及び結果

#### (1) 調査目的

本調査の目的は、実際にボランティア活動を生み出している授業の担当教員へインタビューをし、授業内容や授業後活躍している学生ボランティア組織の現状を把握し、ボランティア活動を大学教育で促すことが学生の自主性にどのような影響を及ぼしているのかを考察することにある。

#### (2) 対象者と調査日時

2020年9月にインタビュー調査を行った。調査対象者は、後掲、Table3記載の授業Aを担当している教員である。(以下、「担当教員」とする。)

インタビュー調査は、愛媛大学城北キャンパス内の研究室で行い、インタビュー時間は、1時間であった。あわせて担当教員から活動をまとめた資料や今後ボランティア活動を育成するプログラムとして考えられている概要資料などの提供を受けた。

#### (3) 授業の概要と特徴

2019年度の授業スケジュールは以下の通りである。【 】内は授業担当者等。

1. 避難所運営ゲーム (HUG) 【教員】
2. 最近の自然災害・地震・津波のしくみと被害 【教員】
3. 行政の災害対応 【松山市危機管理課職員】
4. すまいの耐震化と地域の防災活動 【松山市危機管理課職員】
5. 地震火災とシミュレーター 【教員】
6. 風水害と土砂災害 【教員】
7. 気象予報・避難情報と避難行動 【教員】
8. 災害報道とインターネットの活用 【教員】
9. 防災士の役割と災害ボランティア 【教員】
10. 都市災害の特徴と企業の防災活動 【教員】
11. 事業継続計画 (BCP) と災害復興 【教員】
12. 南海トラフ等被害想定とハザードマップ 【教員】
13. 救助技術 (応急手当の基礎) 【松山市消防局職員】
14. 救助技術 (応急手当の基礎) 【松山市消防局職員】
15. 期末試験と振り返り 【教員】

この授業の特徴としては、集中講義であり、実践・実技を伴う授業が計3コマ(上記スケジュール, 1, 13, 14)含まれ、他は座学の授業である。座学では、外部講師の講義の他、「防災士教本」の教科書を中心に、専門分野の担当者が講義をすることで、防災に関する理論、実践を通して、防災士の資格取得を目標としている。なお、受講前に事前レポートを提出することが必要である。

#### (4) 質問項目

本調査では、実際にボランティア活動を生み出している授業の担当教員へ、「開講の契機」、「運営方針」、「担当教員が意図していること」について、半構造化されたインタビュー手法によるデータ収集を行った。以下、データの一部を筆者らの視点で整理して紹介しつつ、若干の分析を行う。

#### (5) インタビュー調査の回答及び結果分析

##### 1) 授業の工夫

担当教員は、授業の工夫として「避難所運営ゲーム(HUG)」というグループワークを、授業の最初に持ってきたことを挙げた。「非常に臨場感があるゲームで、気づきになるんです。こんな時どうしようとか、他の班どうしたのかなとか。終わった後必ず皆で情報交換をする。」と述べており、このグループワークを通じて、災害への気づきが得られる、と指摘する。その後の授業内容をより深く考えられるようになり、受講生の連帯感が高まり座学での授業も集中して聞いているという趣旨の発言もあった。

この授業は、最初の開講から6年が経過している。担当教員の発言からは、学生が理解しやすい授業への改善がな

されてきたことを確認することができる。

## 2) ボランティア活動をする学生の特徴

担当教員は、授業に関する学生アンケートの結果から、防災士の資格を取得したい人は、「家族を守りたい、地域を守りたいという意識がものすごく強く出て」おり、「町への愛着が大きいような気がする」と分析している。

また、担当教員らが行った別の調査結果でも、防災士の資格取得予定の学生と、一般学生とでは、利他的意識に有意な差がみられ、前者の方が、利他的意識が強いと分析している<sup>(4)</sup>。担当教員によれば、利他的意識が強い学生は、単位取得のみが目的ではなく、防災士の資格が取得できるのであれば単位取得は必ずしも目的ではないと感じている傾向がうかがえる、とのことである。

さらに、担当教員は、これまでに取り組んだ防災意識調査の報告<sup>(5)</sup>から、防災士の資格を取得しボランティア活動をしている学生と一般学生とでは、防災に対する危機感や関心に明確な差がでており、特に関心を問う項目「自分の利益にならないことはやりたくない」、「普段は災害のことは考えない」、「自分の身近なところで起きそうなことだけを考える」、「災害対策は耐震補強や防波堤の整備など物理的なものだけで十分だと思う」全ての項目で有意差が見られたと分析している。

## 3) 教員からみるボランティア活動をしている学生の役割

学生ボランティアの具体的な役割の一つは、防災に関するさまざまな技術を学んだうえで、その技術を地域住民に伝えることである。具体的には、HUGの指導や、災害時避難訓練、クロスロード（災害対応カードゲーム教材）に関する技術を学び身に付けたうえで、地域等の現場に向向いて地域住民を指導する役割を担っている。防災に関するイベント等への参加も多く、地区災害計画への参加、水防工法訓練への参加、防災キャンプ、防災まち歩き、防災訓練の企画・参加、災害シミュレーションの操作等、実践的活動を行っている。

担当教員は、教員自身が行かないとできなかったことが、学生ボランティアが技術を身に付けることで、今まで以上に活動を広げていくことができていると、学生ボランティアを高く評価している。学生の防災等に関する技術についても、立ち上げ当初は、毎月1回講習会をしていたが、今では先輩学生が後輩学生に教えており、継承していく力も身に付けている。

筆者らからみて特筆すべきは、担当教員が、学生ボランティアを「同じ方向性を持った同志」として位置付けていたことである。これらは、防災士という資格を取得した学生ならではの、有資格者としての扱いであり、ボランティアとしての市民というより、有資格者としての関わりを重視していると考えられる。担当教員は、学生のボランティ

ア活動について、「防災士の資格を取得した学生の災害ボランティア活動であり、一般の学生ボランティア活動とは別のもの」として捉えている。

## 4) 行政と連携した授業の有効性

インタビューから、市役所などの行政と連携した授業を展開することで、地域密着型の学びができてきていること、現場の方からの声は防災活動を学ぶうえで、非常に有効な手段となっていることが分かった。また2020年で、当科目から輩出される防災士が1000名を超えることになり、担当教員は、防災士の資格を持つ学生ボランティア「防災リーダークラブ」の認知度が年々あがっていることで、県や各地域から依頼があり、アドバイザーとして活動していくことに繋がっており、地域への活動普及に良い結果をもたらしていると分析している。

こうした状況について、筆者らは、学生防災士誕生後、ボランティア活動をしたい学生にとって活躍できる場所が数多く設けられ、社会に出ても地域や職場で防災リーダーになれるという好循環の仕組みができてきていることを評価すべきと考える。また、大学教育の社会貢献活動として、うまく実践に結び付けられている一事例と考えている。

## 4. 学生に対するインタビュー調査の概要及び結果

### (1) 調査目的

本調査では、前掲の授業を契機にボランティア活動を行っている学生へインタビューを行った。具体的には、以下の2種の調査を行った。①ボランティア活動を行っている学生へのインタビュー調査と、②活動を開始する契機となった、あるいは、活動を続けていくうえで影響があったとする大学授業について、授業の詳細を調査した。①については、大学生4名にインタビュー調査を実施した。調査目的は、行政や地域に直接関わる社会活動に携わっている学生ボランティア組織の現状を把握し、ボランティア活動を行う学生の自主性と大学教育との間にどのような関係があるかを考察することにある。本稿では、トランスクリプトを整理し、学生ボランティア活動の契機、そして大学教育について抜粋し、インタビュー内容は趣旨を損なわないように再構成している。②については、愛媛大学の大学院生2名にメールとウェブ会議システム「Zoom」を利用してインタビュー調査を実施した。調査目的は、①でボランティア活動を開始する契機となった授業について、より掘り下げて詳細を聞き、これらの授業の特徴を把握することにある。

### (2) 対象者と調査日時

① 2019年8月にインタビュー調査を行った。調査対象

者は、Table2のA～Dの4名（4名は同席している）で、以下のとおりである。

Table2：調査対象者の属性

対象者	学年	性別	活動領域	調査
A	M1	F	防災リーダークラブ	①②
B	B3	M	防災リーダークラブ	①
C	B2	M	防災リーダークラブ	①
D	B1	F	防災リーダークラブ	①
E	M2	F	防災リーダークラブ、障がい学生支援	②

インタビュー調査は、愛媛大学城北キャンパス内の研究室で行い、インタビュー時間は、2時間であった。

②2020年5月にインタビュー調査を行った。調査対象者は、①のインタビュー調査対象者のうち1名（A）と、またA～Dまでと同じボランティア団体に所属している1名（E）である。インタビュー調査は、メールによる質問及び回答に加え、「Zoom」を利用した面接方式をそれぞれ個別で行った。面接方式によるインタビューは、30分程度行った。あわせて、インタビュー対象者から関連する授業資料等の提供を受けた。

### (3) 質問項目

本調査では、①では、「どのような経緯で、ボランティア活動をするようになったのか」、「普段の活動は、どのようなことをしているのか」、「普段の活動で困っていることや問題だと思っていることはあるか、具体的にどのようなことか」、「大学や教員に望むこと」について、半構造化されたインタビュー手法によるデータ収集を行った。②では、①のインタビュー時に回答があった、「ボランティア活動を始めるきっかけとなった授業」について、授業内容を問う調査を行った。あわせて、「ボランティア活動を続けていくうえで影響があったと考える授業」についても授業内容を問い、「愛媛大学シラバス」により、具体的内容を確認した。

### (4) インタビューの回答結果

#### ①-1 活動を始める経緯

Dを除く全員が、愛媛大学が提供する授業の履修を契機にしている。その授業の履修動機は、「資格取得ができるから・就職活動に有利だと考えたため」（A, B, C）等の消極的理由であった。なお、「その分野に関心があった」と回答した者はいなかった。

#### ①-2 授業履修から活動参加への経緯

「単位取得だけではつまらない・習ったことを活かしたい」（A, C）など、授業によって活動への参加意欲を高めていたことが確認された。Bは、授業担当の先生から話を聞いて、「じゃあ、やってみようかな」と思い、参加した」と直接的な教員とのやりとりを挙げた。

また、活動を始める経緯となった授業の履修は、全員1回生時点であった。授業で紹介されたボランティア活動を、自らのサークル活動の一環として候補に挙げるとともに、導入教育がボランティア活動を行おうとする学生への刺激になっていたことが推測される。

#### ①-3 ボランティア活動継続と大学授業の関係

A, B, C, Dは、活動に参加する契機になった授業に、次年度以降も、単位履修に関わらない「先輩学生」として参加していた。具体的には、授業内にて実施されるプログラムで受講者のフォローに入り、授業プログラムを支えるメンバーとなっており、先輩学生としての授業でのフォローや活動紹介を自らの活動と位置付け、積極的に捉えていた。これらは、ボランティア活動を継続する際にも、大学授業で「先輩学生」として学生へ教えることで、自身の技術が身に付いていることへの確認作業にもなっていることがうかがえる。

#### ①-4 ボランティア活動におけるSNS利用と運営継続上の悩み

大学授業を契機として加入した活動であっても、基本的には学生が自主的に運営、活動を行っている。そのため学生が活動を継続する際の工夫や悩みを尋ねた。

その結果、ボランティア組織内及び広報活動において、SNS（FacebookやTwitter）を積極的に利用していた。新生の勧誘においても積極的に活用し、通常の活動において仲間や人手が欲しい時には、SNSを活用していた。

一方で、組織内の情報共有もSNSに頼ることが多いため、メンバー間のレスポンスの迅速さや積極的行動に差がある。相手の顔や表情が直接見えないSNSでは、感情が読み取りにくいことから、活動に対しても思いや姿勢が見えにくいと悩みを抱えていた。学生が授業やアルバイト等で時間がとりにくい中、対面での会議等を補う目的でのSNSが、いつしかSNSのみの情報共有や意見交換に変化している。それゆえの運営上の悩みと分析できる。

#### ②ボランティア活動を始める契機や活動を続けていくうえで影響があったと考える授業内容について

対象者のA, Eに授業内容を具体的に聞き取り、その特徴をTable3に示した。授業Aは、本稿3.で調査・検討の対象とした授業である。

Table3：ボランティア活動のきっかけ（影響）となった授業の特徴

授業	具体的内容
A	外部講師による講義あり 実践・実技あり 映像視聴あり 先輩学生による報告あり 資格取得の機会あり
E	映像資料あり 資格取得の機会あり 学生からのアウトプット重視

ウ	学生からのアウトプット重視
エ	外部講師による講義あり 実践・実技あり
オ	先輩学生による報告あり 実践・実技あり 映像視聴あり 資格取得の機会あり

アの授業では、学生Aによれば、「担当教員のみならず、関係する行政職員及び専門家、住民ら外部講師の話聞くことができ、学生が参加する体験型のプログラムも多くある。」さらに、「先輩学生がサポートとして入っており、学生から現実の話がきける機会となっている。」と述べている。

イの授業では、学生Eによれば、「実生活に関係するので、内容は専門的だが身近に感じることができた。」さらに「毎回小テストがあり、前回の授業が理解できているか復習ができるようになっており、授業後には関連する国家資格を受けてみようと思えるくらい身に付いた。」と述べている。専門授業だが、日常生活と結び付けて学ばせる授業展開をしており、この学生は、専門の資格（国家資格）にも合格するほど知識を身に付けている。

ウの授業では、学生Eによれば、「テキストを見ながら先生が話をしつつ、学生に質問をして議論を深掘りしていくという流れで、テキストに沿って授業は進んでいくが、テキストに書かれていることが必ずしも正解ではないということ学べる授業だった。学生に自分の考えを言語化して、他者に分かりやすく伝える機会を与えられているように感じた。」さらに、「毎回授業開始時には、時事問題を取りあげて、学生が意見をいう機会があった。」と述べている。日々起こり得る問題を、学生へ示し、それらの問題についてどのように考えるかを教員の考えを伝えるだけでなく学生自身の言葉で説明する力を身に付けさせており、ディベートを取り入れているような講義となっている。

エの授業では、学生Eによれば、「カウンセリングについて座学と実技があった。カウンセリング技法を体験する中で、先生の体験談をもとに、どのように話を展開していくか、使える技法はあるか等を試行錯誤しながら実践し、講義の最後には先生がどのように対応して問題解決したかを教えてもらうような講義形式だった。」と述べている。この授業では、実際心の問題を抱えている人とどのように関わっていくのかということを考え、技法を習得し、教員の対処法の教えを受ける一連の授業方法のもとで学び、理解を深めている。

オの授業では、視覚障害・聴覚障害について知識だけではなく「視覚障害者にとって世界はどのように見えているか」「聴覚障害者が講義に出た時に教員の声はどのように聞こえているのか」など疑似体験を通して理解を深める内容である。学生Eによれば、「聴覚障害のある学生さんを支援するボランティアに所属していたので、手話でコミュニ

ケーションがとりたくて受講し、もともと興味があったが、手話をすぐに実践できる授業としてはとても興味深く、手話検定を受講して資格を取ることに繋がった。」そして、「手話を少しかじっていることで、円滑なコミュニケーションに繋がるような経験が何度もあった。」と述べており、すぐに実践に結び付く学びをしていることが分かる。

これら授業に共通していることは、実際に起こり得る問題を提示し、それに対してどのように対応、対処していくかを考えさせ、行動できるよう学んでいけるようなアクティブラーニング型の授業となっている。

## 5. 考察

ボランティア活動を大学教育で促すことが、学生の自主性にどのような影響を及ぼしているのだろうか。教員へのインタビューを通して言えることは、大学の授業を通してボランティア活動に必要な考え方や技術を身に付けさせることは、学生にとっては、自分も地域貢献をすることができるとの自信を持つことに繋がっていることである。この際の自信とは、新たなことをチャレンジしてみようとの意欲に近いものであり、学生が自身の能力の程度や行動の意義に確信を得ていることを意味するものでは必ずしもない。大学教育が、学生に新しいことにチャレンジする際の支えとなる自信、意欲をもたせることができることが特徴である。従来の考え方では、授業を通じての課外活動は実質的に強制参加に近いものだと考えられてきた。しかし、教員へのインタビューからは、ボランティア活動に参加するか否か、活動にどの程度関わるかは、学生の裁量に任されていることが明らかとなった。この実態に照らしてみると、大学教育は、ボランティア活動への参加を学生に強制しているのではなく、むしろそうした活動に関わる機会を学生に提供することにより、新たなことにチャレンジする気持ちを学生の中に育む役割を果たしているものと考えられる。

次に、ボランティア活動を行う学生の自主性と、大学教育との間にどのような関係があるのか。調査①の4名へのインタビューから見えてくることは、学生は、ボランティア活動を実際に経験することにより、大学授業をより熱心に受講するようになること、つまり、授業で教わる知識や技術の習得により積極的になることである。知識や技術を表面的に理解するだけでなく、実践できるようになるまで理解しようとの姿勢になることが特徴である。学生の受講態度の変化によって、ボランティア活動を充実させ、さらに受講態度が良くなる。この良き循環は、学生の自主性の育成によるものだと考えられよう。

それでは、ボランティア活動参加の契機になる、あるいは、活動に影響をもたらす大学授業とはどのようなものだろうか。ここでは調査②の「ボランティア活動を始める契

機や活動を続けていくうえで影響があったと考える授業内容について」の分析を中心に、有効な授業の具体的特徴を見ていく。

第一に、ボランティア活動に繋がる授業とは、教員が学生に対して一方的に講義をする形式だけではなく、「主体的・対話的で深い学び」を目指すアクティブラーニング型の授業を実施している傾向がある。例えば、授業Aで教員は、本稿3.で見た通り、授業の最初にHUGによるシミュレーションをゲームで実施することにより災害への気づきができ、その後の授業内容をより深く考えられるようになると発言している。このことは、ゲームとはいえ、災害を我がことと捉える機会に繋がり、積極的な受講姿勢を促している。また、関係する行政職員及び専門家、住民ら外部講師の話聞くことができ、学生が参加する体験型のプログラムも多くある。次年度以降は、ボランティア活動をする学生は、先輩学生として授業をサポートしている。このことが、受講する学生にとっても、同じ学生からの実際の話がきける機会となっており、その年の学生の活動参加を促す契機にもなっている。

第二に、学生のボランティア活動への継続的な関わりを促す授業には、そうした活動の直接的契機となった科目のみでなく、多様な専門科目が含まれることに注目したい。とりわけ、ボランティア活動を継続する中で影響を受けた授業とは、学生の心理面に影響を及ぼす内容を含む傾向がみられる。こうした授業の主な特徴は、ボランティア活動で経験しうる「対人的な関わり」「心の問題や技法」を学ぶ点にある。実際、これらの授業で学んだことは学生のその後のボランティア活動において活かされていることが、インタビューを通じて確認できた。

第三に、ボランティア活動を継続するうえで影響を受けた授業の中に、座学重視の授業が入ってくることも興味深い特徴として指摘できる。具体的には、授業イ、ウの講義はテキストを読みながら進めていくものであるが、学生Eによれば、「考えを言語化して、他者に分かりやすく伝える」重要性に気付くと回答している。

先行研究から、主体性を引き出す大学教育には、「答えが存在しないリアルな世界を学生たちに突きつけることが重要」<sup>(7)</sup>であるとの指摘がある。まさに、これらの授業は、現実の社会の一端を学生に見せて、諸問題を考えさせている。私たち研究グループは、これらアクティブラーニング型の授業は、学生のボランティア活動開始の契機になり、ボランティア活動を継続するうえで、モチベーションアップに繋がっていると分析した。

第四に、授業での資格取得について、前述の調査②では、「資格がとれる授業は、その後自信に繋がる」という趣旨の回答があった。そして、担当教員も「単位が欲しいというより、防災士の資格を取りたいという学生がいる」「防災士の資格は、教員採用試験でも20点加点となる他、一

般企業の就活でも面接官から非常に強い関心を示してくれる」ということが述べられていた。これらは学生と教員ともに、資格に繋がる大学授業をメリットと捉えていることがうかがえる。また先行研究<sup>(5)</sup>より、一般学生は、地域の防災活動に取り組むことが難しいと感じ、地域の防災訓練等のイベントに参加する時間を作ることも難しいと感じていることが明らかとなっている。このことから、現代の一般学生にとって、地域に出ていくということ自体にハードルの高さを感じているのではないだろうか。そう考えると、防災士の資格を取得した学生は、防災士という資格によって、地域に出ていける「心のチケット」も同時に取得することができ、資格が地域に出ていくための後押しとなっていると考えられる。

これらの授業で重要な点は、文科省からの単位要請に対応する授業ではないということである。特にAの授業では、多くのボランティア学生（2019年時点での在籍人数は約50名）を輩出し、継続的に活動しているが、活動自体は単位化しておらず、授業外での活動となっている。授業の流れから資格取得をし、授業外でのボランティア活動に繋げるという展開を巧みに生み出しており、一連の流れが生まれ、好循環となっている。授業内容を活かす形でボランティアをしている大学教育の新たな授業形態とも言える。そしてそれが大学生の自主性を育成していると言えよう。

最後に、インタビューを行った学生や教員の発言から、課題も浮かび上がってきた。学生は授業中に行われる活動紹介から、その組織に対する信頼を増して参加する傾向にある。いわば大学教育や教員が「お墨付き」を与えた活動だからこそ、学生は参加している側面は否定できない。また、学生は、自身の知識や技術を活かせる学外の場を求めているが、同時に多様な人が集まる学外の組織に参加することへの不安が大きい。このため、大学授業を通じてのボランティア活動であれば、参加しやすいと感じている。活動参加へのハードルが低くなることは否定すべきではないが、大学教育が、学生の自由な社会参加の幅や可能性を狭める側面もあるのではないか。先行研究<sup>(5)</sup>では、防災に対する危機感や関心を強く持っているという結果だったが、今回のように教員の意向に沿う形で活動をしている学生が、関心は強いが、実際どれほど危機感を持って活動できているのか、いわゆる「優等生」で終わらず、自ら考え行動することがどこまで出来ているのか、これらの積極性はこの調査では分かっていない。さらに、決められたプログラムを実施することを通じて地域や行政と関わるようになり、地域住民や行政の意向と学生が望むこととの間に認識のズレや矛盾・軋轢等が生じていないだろうか。学生のニーズに合った大学授業の提供とも関連し、学生の社会参加の橋渡しとなる大学授業の役割がより求められているのではないだろうか。今後の研究課題としていきたい。

## 6. おわりに

本稿では、ボランティア活動を単位化する授業ではなく、その授業のテーマに深く結びつくボランティア活動を実施する例をとりあげ、教員と学生のインタビューを通じて、大学教育が自主性を育成する諸条件等を検討してきた。具体的には、ボランティア活動を生みだしている授業科目の担当教員へインタビューし、教員目線での大学授業の内容や工夫、履修学生の受講姿勢について分析を行った。また、大学の授業を契機に、ボランティア活動に参加し、継続的に活動をしている学生へのインタビューを通じて、大学授業が彼/彼女たちに与えた影響の特徴と課題を整理した。さらに、学生には、ボランティア活動を始める契機や活動を続けていくうえで影響があったと考える授業を挙げてもらい、その科目がどのように魅力的であったかを尋ねた。

特徴的なことは、授業履修の際には、学生は履修に際し消極的であっても、アクティブラーニング型の授業によって、学生ボランティア活動への参加意欲が増すこと、大学授業はボランティア活動を継続していくために学生の心理面を支える影響を持つ傾向が明らかになった。これらは教員へのインタビュー調査でも言及されており、グループワークを授業の最初に取り入れる等、授業進行での工夫がみられた他、授業後もボランティアとして活躍できる場を提供することで、ボランティア活動を継続するための意欲の維持に繋げていた。

本研究では、インタビューを通じ、アクティブラーニング型の大学教育という学びの場を考えてきた。そして、前述した課題を踏まえ、今後の大学教育のあり方と学生の自主性育成という問題を考えるうえで、より多くの学生を統計的に多方面から捉える必要も出てきた。今後は、インタビューのみならず、アンケートなども用いて検証を深めていきたい。

### 参考文献

- (1) 青木理奈, 小佐井良太 & 鈴木静 (2020) 「学生ボランティア組織の現状と課題—愛媛大学の学生聞き取りから—」, 『愛媛大学法文学部論集 (社会科学編)』 48, 1-28.
- (2) 青木理奈, 松本美紀 & 曲田清維 (2005) 「2004 年新居浜市水害における高校生ボランティア活動に関する研究 (第2報) 高校生のボランティア意識の検討」, 『愛媛大学教育実践総合センター紀要』 23, 151-164.
- (3) 荒井俊行 (2016) 「大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」, 『日本教育工学会論文誌』 40, 2, 85-94.
- (4) 二神透, 羽鳥剛史 (2016) 「大学における防災士資格希望者の防災意向分析」, 『土木学会論文集』 72, 2, I\_15-I\_20.
- (5) 二神透, 中嶋友哉 (2019) 「一般学生ならびに防災活動参加意向者の防災意識分析」, 『土木学会論文集』 75, 2, I\_21-I\_26.
- (6) 河井亨 (2012) 「学生の学習と成長に対する授業外実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングの役割」, 『日本教育工学会論文誌』 35, 4, 297-308.
- (7) 川島, 大野 & 小林 (2013) 「学生の主体性を引き出す大学教育とは」, 『大学時報』 350, 22 大野, 座談会.
- (8) 毎日新聞 (2011) 「国立大4割単位認定」, 『毎日新聞』 11月7日.
- (9) Matsumoto, M., Aoki, R., & Magata, K. (2005) 「2004 年新居浜市水害における高校生ボランティア活動に関する研究 (第1報) 防災意識形成のための高校生災害ボランティア意識と社会的役割に関する断面調査」, 『愛媛大学教育実践総合センター紀要』 23, 99-110.
- (10) 三谷はるよ (2016) 『ボランティアを生みだすもの: 利他の計量社会学』, 有斐閣.
- (11) 文部科学省 (1998) 「ボランティア活動等に係る学修の単位認定」.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/1247229.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1247229.htm) (2020年6月8日閲覧)
- (12) 文部科学省 (2005) 中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」(2005).  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm) (2020年6月8日閲覧)
- (13) 文部科学省 (2011) 「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について (通知)」.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/saigaijohou/syousai/1304540.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/saigaijohou/syousai/1304540.htm) (2020年6月8日閲覧)
- (14) 文部科学省等 (2016) 「学生のオリンピック・パラリンピック競技大会及び同大会に係るボランティア活動等への参加に当たっての教育上の配慮について (通知)」平成28年4月21日付28ス庁第59号.
- (15) 文部科学省 (2019) 「令和元年台風19号に伴う学生・生徒のボランティア活動について (通知)」令和元年10月16日付元文科高第568号.
- (16) 岡本栄一 (2008) 「ボランティア活動と福祉課題—特に当事者問題との関係をめぐって」, 『社会福祉学』 49, 3, 107-113.
- (17) 桜井政成 (2020) 「東京五輪開催に向けての教育現場でのレガシーに関する批判的検討—大学におけるボランティア活動を例に一」, 『政策科学』 27, 3, 145-158.
- (18) 佐々木正道 (2003) 『大学生とボランティアに関する実証的研究』, ミネルヴァ書房.
- (19) 谷田勇人 (2001) 「福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析」, 『社会福祉学』 41, 2, 83-94.

<sup>1</sup> 本研究は、JSPS 科研費 19K21723 及び 2019 年度法文学部戦略経費 (愛媛大学) の助成を受けたものである。

<sup>2</sup> 愛媛大学の共通教育科目では、学士基礎力を育成するため、「初年次科目」、「基礎科目」、「教養科目」、「発展科目」の4つの科目群を配置し、各々において特徴的な取組みを行っている。このうち本稿の科目は、本学独自の資格取得を目的とする科目や全学的な副専攻的科目として開設された「発展科目」である。[https://www.ehime-u.ac.jp/faculty/general\\_education/](https://www.ehime-u.ac.jp/faculty/general_education/) (2020年10月1日閲覧)

<sup>3</sup> 「シラバス」とは、授業担当者が授業開講の前に受講生に配布する講義計画のことである。